

二〇二五年度 高知大学入学試験問題 (学校推薦型選抜Ⅱ)

小 論 文

試験時間 百二十分

教育学部 (学校教育教員養成課程)

問題冊子 ページ…………… 一〜三
解答用紙…………… 二枚
下書用紙…………… 二枚
配点…………… 五十点

注意事項

- 一、試験開始の合図まで、この問題冊子を開かないこと。
- 二、試験中に問題冊子・解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び下書用紙の不備等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 三、各解答用紙に受験番号を記入すること。
なお、解答用紙には、必要事項以外は記入しないこと。
- 四、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所記入すること。
- 五、解答用紙の各ページは、切り離さないこと。
- 六、配付された解答用紙は、持ち帰らないこと。
- 七、試験終了後、問題冊子・下書用紙は持ち帰ること。
- 八、試験終了後、指示があるまでは退室しないこと。

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「教育者は他のどのような職業人よりも、遠い将来を見定めることにかかわっている」——。かつて、アメリカの哲学者であり教育学者でもあるジョン・デューイは、このように述べた。教育者が未来を見定める必要があるのは、教育が提供するものは、学習者が未来で生きていくための準備となる経験だからである。いまの子どもたちは、一〇年後、二五年後、五〇年後、どのような世界に生き、そのときに求められる力はどのようなものなのか、そういうことを踏まえる必要がある。これからの教育を考えることは、その教育がなされる時点のさらにその先の未来を見据え、その未来ヴィジョンを教育のあり方に織り込んでデザインすることを意味している。

近年日本では、教育のあり方をめぐって、大きな変革が始まろうとしている。そのなかで、「アクティブ・ラーニング」と呼ばれ、その後、「主体的・対話的で深い学び」という言い方でも語られるようになった学びのあり方が注目されている。ここでは、教科書に書いてあること、つまり、すでに明確になっていることを理解し、覚えていくという学びから、より能動的に自分で考えるという学びへと切り換えていくことの重要性が唱われている。

しかし、そのような議論がある一方で、学校現場では混乱も見受けられる。「数学で、生徒が自分で問題を解くというこれまでのスタイルも、受け身ではないアクティブな学びなのではないか」というように、「アクティブ・ラーニング」という言葉だけが先行し、そこで目指されていることがきちんと共有されていないようである。また、いま現場にいる教員は、これまで知識伝達型教育の教員養成の制度の下で育ち、それを忠実に実践してきたので、経験したことのない新しい方法で教えなければならぬことに、当惑もあるようだ。さらに、新しい試みをしてみようという教員が出てきても、従来からの方法から離れることを不安に思う管理職や同僚、保護者からのプレッシャーは大きい。

時代が変われば、そこで求められる力や資質が変化するため、教育のあり方も変わっていくのは当然であろう。人間や社会において、時代によらず普遍的で大切なことがあるのは確かだが、時代の変化に合わせて変わるべきものもある。いつまでも、過去に最適だった方法を取り続ける理由はない。何をどう学ぶかは、時代とともに考え直され、必要な範囲で変化させていくのが自然である。

このような教育変革への問題意識は、日本だけのものではなく、世界的にも変革への道が模索・検討されている。例えば、国際団体ATC21sで

提唱された「二十一世紀型スキル」では、「思考の方法」、「働く方法」、「働くためのツール」、「世界の中で生きる」ことを学ぶことが重要であるとして、それらを構成するスキルを定義している。

他方、OECD(経済協力開発機構)の「コンピテンシーの定義と選択」プロジェクトは、「異質な集団で交流すること」、「自律的に活動すること」、「相互作用的に道具を用いる」ことが大切だとする「キー・コンピテンシー(主要能力)」を掲げている。

さらに、最新の「OECDエデュケーション2030」で示された「OECDラーニング・コンパス」では、「個人と社会の幸福」に向けて、学習者が、「新しい価値をつくる」、「責任をもつ」、「緊張関係やジレンマ(葛藤)を和解させる」という力をもって「予期」し、「行動」し、「振り返る」ことを繰り返し行っていくというモデルが示されている。そして、それを可能とするために、「知識」と「スキル」と「態度と価値」をコンピテンシーに変えていくという構造になっている。

ほかにも、心理学の研究成果にもとづく提案もある。テンプル大学のキャシー・ハーシュIIパセックと、デラウェア大学のロバータ・ミシュニツク・ゴリンコフは、「健康で、思慮深く、思いやりがあり、他者と関わって生きる幸せな子どもを育て、皆が他者と協力し、創造的で、自分の能力を存分に発揮する責任感あふれる市民となる」ために大切な能力を、認知心理学・発達心理学の知見を踏まえて「6Cs」と呼ぶ六つのCのキーワードにまとめている。その六つのCとは、Collaboration(協働)、Communication(意思疎通)、Content(内容/中身)、Critical Thinking(批判的思考)、Creative Innovation(創造的革新)、Confidence(自信)である。

(中略)

以上のように、さまざまなおとこでこれからの時代を生きていくための力について、グローバルな世界における問題解決と幸福(ウェルビーイング)の実現のための力の育成についての議論がなされている。これからの未来を見据えるとき、これまで以上に求められるのは、他者とともに生きながら、新しい発想で新たな価値を生み出し、それを他の人と享受するという力であるように思われる。

(出典 井庭崇編著 『クリエイティブ・ラーニング 創造社会の学びと教育』 慶應義塾大学出版会 二〇一九 ただし出題にあたり一部改変)

設問一 本文を四〇〇字以内で要約しなさい。(二〇点)

設問二 本文の内容をふまえて、あなたは大学に入って新たな発想で新たな価値を生み出す力をどのように身につけていきますか。あなたの考えを六〇〇字以内で述べなさい。(三〇点)